

<特別寄稿>

何のためのフィールドワーク？

柴坂 寿子*

Fieldwork: What for?

Hisako SHIBASAKA

筆者は幼稚園・保育園などでフィールドワークを行い、また様々な現場でのフィールドワークに基づいた論文の査読、審査、アドバイスなどに関わってきた。ここではそこで実感してきた点について若干述べておきたい。それは今までもフィールドワークの多くの先達たちが繰り返し指摘してくれてきたことでもある。先達たちの言葉をいくつか引用しつつ、今後に向けて今一度振り返っておきたいと思う。

菅原（2006）によれば、フィールドワークとは他者、つまりフィールドで私たちが出会う現地の人びとについて少しでも分かっていく実践であり、現地の人びとの生のかたちをいきいきと分かることを目指すものである。そのためのフィールドワークの態度設定は、人びとの膨大な実践の積み重ねである「普通に生きている」ことの偉大さに日々新しく驚き続けることである。菅原はさらに私たちは誰もががある視角から照らせば現地の人なのだと言及する。フィールドワークをする自分もまた自分の日常生活の場においては現地の人であり、フィールドワークは、最終的には、誰にも等しく存在している「普通に生きている」ことを少しでも理解することを目指すと考えられるだろう。

フィールドワークは確かに研究方法のひとつではあるが、単なるハウツーとして扱ってしまうと、菅原（2006）の指摘するようなフィールドワークの本来の目的から大きく外れていってしまうと思う。

例えば、フィールドでの面白い事例がたくさん記述され、先行研究や理論といった問題部分、考察部分も書き込まれているのに、何か釈然としない論文に出会うことがしばしばある。事例から読み取れそうなこと、たぶん論文の著者が一連の事例から重要だと感じ取っていることがあると思われるのに、事例の分析として書かれていること・問題部分・考察部分が、それらとずれているのだ。データと分析が乖離している状態であり（ロフランド・ロフランド、1997/1995）、分析がデータに基づいて展開されていないために起こると考えられる。逆に言えば、データと関係なく、問題部分に合わせたように分析が行われ、考察部分も書かれているのだと思われる。せつかくの事例がもったいないと思う。何より、現地の人びとについて少しでも分かっていく、「普通に生きている」ことの偉大さに日々驚き続けるというフィールドワークの本来の目的や態度設定から大きく外れてしまっていると思う。

例えば、フィールドワークで事例は集まったので今は理論を探しているとか、事例は十分あるが理論が見つからないとかといった相談を受けることもしばしばある。しかし、データに基づいて分析を展開するためにはまず事例自体からのボトムアップの作業が必須であり、それを飛ばして何かの理論を探すことは上述したような乖離につながってしまうのではないかと思う。

ロフランド・ロフランド（1997/1995）はボトムアップのための作業としてコーディングを挙げている。

* お茶の水女子大学名誉教授

コーディングというとは何かカテゴリーを決めてそれを当てはめていくと誤解されることがあるが、ここで言われているのはそうではなく、事例や事例の一部から読み取れることを言語化し、抽象化していく作業のことである。その作業の際にロフランド・ロフランド (1997/1995) はいくつかの問いを発することを推奨している。例えば、「これは何についてのものかと考えることができるのか?」「このデータ項目は、あるトピックについてのいかなる問いを発しているのか?」「このデータ項目は、あるトピックについての問いに対して、いかなる種類の回答を示しているのか? (いかなる命題が示されているのか?)」「これは何か。これは何を表しているのか?」「これは何の事例なのか?」「眼前で進行しているのは何なのか。人々は何をしているのか。何が起きているのか。ここで問題となっているのはいかなる種類の出来事なのか?」などである。

こうした問いを繰り返し、とりあえずの答えを言語化して抽象化を進め、それを何度も修正する中で、自分自身の分析の視点も明確化し、データから展開した分析も進んでいくと思う。ロフランド・ロフランド (1997/1995) は、論文の内容が、自分が重要であると感じ取っている何かについて自分の言いたいと思っていることを語っていると感じるなら、自分自身を信頼せよとアドバイスしている。それは菅原 (2006) の指摘するフィールドワークでの態度設定から言えば、フィールドでの驚きに誠実であり続けることであろう。こうしたボトムアップが進めば、それに関連した先行研究や理論を見いだすことも可能になるかもしれないし、もし適切なものが見つからなければ、必ずしも既存の理論にこだわる必要もないと思う。むしろ自分の分析視点やフィールドを相対化し、位置づける作業をきちんと行った方がよいのではと思う。

森 (2015) は質的研究について、以下のように警告している。様々な方法や認識枠組みが他分野から輸入され、また独自に開発されたことで、質的研究はやりやすくなったが、かつて量的研究が陥った落とし穴に再び注意する必要がある。つまり、この方法を使えばよい (でないといけない) 、こういうものを見方をすればよいという形式と認識の強要である。方法・認識枠組みが限定されれば当然問題も限定され、面白くない論文が増え、研究すること自体もつまらなくなる。既存の理論や分析枠組みを当てはめるのではなく、面白い、有益であると感じた問いを立て、それにあった方法を選択・開発し、データから導かれる結論が既存の理論に当てはまらなければ新たな認識枠組みを提示すること、これが研究の苦しみであり喜びだったのではないのか、と。森は最後に質的研究に携わる者に次のように問いかけている。「研究本来の喜びが、方法と認識枠組みの強制という絶望の檻に再び閉ざされることがないように、常に方法と認識の刷新を目指す。質的研究者はこういう苦役を追いつつ、夢を追うのです。楽ばかりではありません。お覚悟はよろしくて、でございます」。

森の問いかけは「何のためのフィールドワーク?」と言い換えることもできるだろう。分析に行き詰まったとき、無理矢理つじつまを合わせそうになったとき、「何のためのフィールドワーク?」と自分自身に問い、フィールドワークの本来の目的を思い出し、また原点に戻ってデータに向きあえればと思う。

引用文献

- ロフランド, J. ・ロフランド, L.H. (1997) 社会状況の分析 一質的観察と分析の方法 (進藤雄三・宝月誠, 訳). 東京: 恒星社厚生閣. (Lofland, J., & Lofland, L.H. (1995). *Analyzing social settings: A guide to qualitative observation and analysis*. 3rd. edition, Belmont, CA: Wadsworth Publishing Company.)
- 森直久 (2015) 『質的心理学研究』編集委員会より. 日本質的心理学会メールマガジン No. 124.
- 菅原和孝 (2006) フィールドワークへの挑戦 ―＜実践＞人類学入門. 京都: 世界思想社.